



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「インドに還る、インドに伝える」①

古いお付き合いの“印友”に招かれて新潟に行ってきた。インドの話をしてきたのだが、わが輩など足元にも及ばないインド猛者の前で、したり顔をして講演するのはおこがましいことだ。

講演といっても、いつものお笑い話なので肩がこることもない。たぶん楽しんでいただいた、とわが輩は思う。

二度目の新潟行きなのだが、今回は佐渡島に渡ろうと決めていた。目的は明快である。Nichiren の佐渡をみるためである。インドと Nichiren にどのような関係があるのか、後段に譲るとして、とりあえずは旅の案内をしよう。

関空から新潟まで LCC を使えば、航空運賃は 1 万円にもならない。東京に行くよりも安価である。新潟空港に着くと“印友”が出迎えてくれた。1976 年インドで出会った。インド政府から賞を授与された猛者である。

さっそく回転寿司店でご接待を受けたが、これが旨い！講演後の二次会は、なかなかの洒落た店でご接待を受けた。次の朝、新潟港から佐渡島に向かった。ジェット・フェリーよりもカー・フェリーを選んだ。安価ということもあるが、ゆっくり新潟港を出航する風情を重んじた。客室でゴロ寝しているといつの間にか眠っていた。これで二日酔いは覚めた。港が近づくと、佐渡島が迫ってきた。ダイナミックで自然豊かな島だ。トレッキング姿の観光客もいた。

佐渡島というと暗く寒いイメージがわが輩を覆っていた。Nichiren 流罪の島だからである。

Nichiren の思想は、佐渡島以前（佐前）と以後（佐後）に分けられる、といわれている。余りにも厳しい環境のため、思想に影響を与えたのか、それならその環境を見てみたいと思っていた。

わが輩は路線バスに乗って、Nichiren が最初に監禁された塚原三昧堂（根本寺）を目指した。そのころは死骸捨場であつたらしい。堂の絵額には、雪に覆われた粗末な庵で合掌する姿が描かれている。11 月 1 日に到着したので、寒さは厳しかったであろう。翌年 4 月 7 日まで庵に逗留、大著『開目抄』を書き上げている。小乗から大乘密教經典などを引用して自己の思想を表明している。

わが輩が不思議に思うのは、流罪人がもろもろの經典をもって佐渡に渡ることができたか、ということである。資料が手元になれば論文は書けない。おおよその学者の研究室は資料

が山積みになっている。

資料は Nichiren の頭の中にあった。だから論争のときは取り出し自由自在である。

御苦労なことに、こんなところまで禅・浄土・真言の僧徒が押しかけてきた。そもそも論争は対一であるものなのに、一人 vs 多数で問答をしかけたが論破された。禅者なら禅の知識はあるが、総合的な知識がない。だから Nichiren に歯が立たなかったのであろうか。

現在(5月)の風景は、のどかな水田が広がっている。少しも厳しい環境には思えない。

バス亭に引き返し、運行表をみて困った。次のバスがない。地方は自家用車がないと生活できないと改めて知った。通行人に聞いても、日常に乗らないので意外と知らない。そこで、他の路線を求めて歩き出した。

歩くこと、待つことは苦痛ではないが、腹が減った。ふと見ると、土田麦僊（日本画家）と弟の杏村（哲学者）の石碑があった。彼らの生誕地である。麦僊の絵は何度も観たことがある。杏村の名前だけは知っていた。

これは拾い物だ、などと悠長に構えていると陽が傾き始めた。とにかくバスに飛び乗った。向かうのは一の谷（さわ）の妙照寺である。

『開目抄』は、迫害に対する超克宣言のような書である。妙照寺では『観心本尊抄』を著した。

心を観ることは瞑想的・哲学的といえる。道元や親鸞は哲学者の好むところである。哲学者と Nichiren の関係は残念ながら薄い。内省的なものがないからなのか。妙照寺でそのヒントをつかめるのか。

陽が沈みかけている。急げ！